

日本学術会議・学術フォーラム「コロナ禍を共に生きる #6 ウィズ／ポストコロナ時代の民主主義を考える：「誰も取り残されない」社会を目指して」2022.3.15

講演「コロナ・パンデミックと民主主義」概要

安中 進（早稲田大学）

新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るい始めて既に2年ほど経過している。この感染症によって特に民主主義国において多くの死者が発生しており、中国を中心とする権威主義国では、相対的に死者が少ないといった主張が見られる。しかしながら、権威主義国の報告するデータは、一般的に信頼性が低く、民主主義国のデータよりも実態を反映していない疑念がある。

こうしたデータの質の問題を考慮に入れた分析を行うと、必ずしも権威主義国がコロナへの対処に優れていて、民主主義国が劣っているとはいえない可能性が指摘できる。

さらには、超過死亡といったデータを用いた分析をすると、むしろ、民主主義国の方が死者数が少ない可能性すら示唆される。

こうした分析結果からは、国家による強権の発動や自由の制限を安易に称揚するような議論には、十分な注意が必要であると結論付けられる。

略歴 安中進（あんなかすすむ） 早稲田大学高等研究所講師 早稲田大学大学院博士課程修了（博士 政治学） 専門は比較政治経済学・計量政治学

2020年に小野梓記念学術賞を受賞。主な業績に Political regime, data transparency, and COVID-19 death cases (SSM-population health) など。